大坂五人衆のひとり
後藤又兵衛
ゆかりの地 兵庫県加西市

ゆかりの地

西岸寺　加西市北条町北条1126（北条町駅徒歩10分）

後藤又兵衛の甥が僧となった寺。又兵衛の妹は神吉城主に嫁いだが、その子房太郎は落城の時5歳であった。長じて西岸寺の恵覚となる。
西岸寺には、又兵衛の槍などが残されている。

「槍、薙刀など」西岸寺所蔵
※一般公開はしていません

多聞寺　加西市尾崎町228（播磨下里駅徒歩15分）

「後藤又兵衛」の菩提寺。大坂夏の陣で憤死した又兵衛親子を弔うために、又兵衛の一周忌にあたる元和2年（1616年）に又兵衛の子太良正方が寄付して上棟・開山したと伝えられている。本堂には後藤又兵衛の位牌が祀られている。

「位牌」多聞寺所蔵

末裔の方々

「後藤家系図」福崎町後藤家所蔵

「槍・脇差・裃」坂元町後藤家所蔵

「位牌」大村町後藤家所蔵

後藤又兵衛 墨絵大屏風

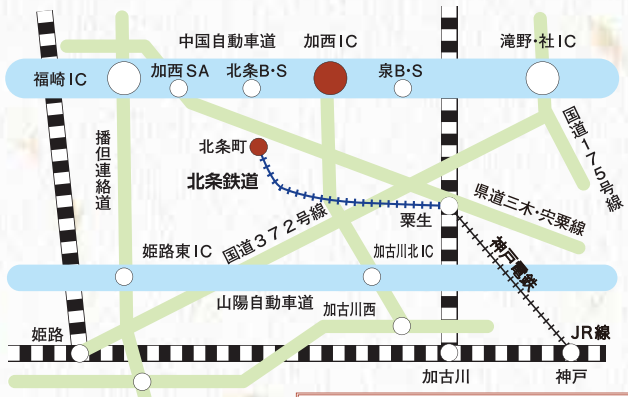
加西市ゆかりの武将「後藤又兵衛」の墨絵を墨絵師『御歌頭』さんに書いていただきました。
現在は多聞寺本堂に奉納されています。

お問い合わせ先：加西市観光案内所

加西市へようこそ！当案内所では、耳よりな観光情報を分かりやすくご案内しております。
スタッフが常駐していますので、加西市にお越しの際は、是非、お立ち寄り下さい。

■ 住　所／加西市北条町北条28-2（北条鉄道・北条町駅内）
■ 電　話／0790-42-8823
■ 営業時間／8:30～17:30
■ 休業日／無（年末年始を除く）

アクセスマップ



大阪から	車で75分・電車で110分
神戸から	車で65分・電車で90分
姫路から	神姫バス（北条行）50分

（一社）加西市観光協会

「黒田二十四騎画帖」　福岡市博物館所蔵

人物

後藤又兵衛基次（ごとうまたべえもとつぐ）は、安土桃山時代から江戸時代初期の武将。黒田氏、豊臣氏の家臣。通称は又兵衛で、後藤又兵衛（ごとうまたべえ）として広く知られる。六尺（約180センチ）を超える巨漢で、「槍の又兵衛」の呼び名を持つ。黒田官兵衛（法名如水）、豊臣秀頼に仕え、数多くの軍功を挙げ、「黒田二十四騎」「黒田八虎」「大坂五人衆」の一人に数えられた。

出生

諸説あるが、永禄三年（1560年）四月十日に加西郡山下村（今の加西市山下町）に出生『山田村史』。江戸時代の地誌『播磨鑑』では、その南隣の姫路市山田町に生まれたと記されている。父は、小寺政職の下にいた後藤新左衛門基国で、又兵衛はその次男として生まれた。

詳細は不明であるが、父の基国は又兵衛が幼少のころに亡くなり、又兵衛は姫路城主黒田官兵衛に預けられ、青年期までを官兵衛の養育で過ごす。後に因縁深い間柄となる長政とは、兄弟のような関係で育ったと言われる。

しかし官兵衛が有岡城（伊丹市）で幽閉された謀略に母方の伯父藤岡九兵衛が関与していたことから、又兵衛は一族追放となり、天正九年（1581年）秀吉の家臣仙石権兵衛久秀に預けられることになった。その後、戸次川の戦いにおいて仙石氏が島津家久に大敗し、領国の讃岐国に逃げ帰った後に、又兵衛は官兵衛の子長政に呼び戻された。その時彼は二十四歳、知行は百石で、官兵衛の家臣栗山利安（黒田二十四騎のひとり）の配下になった。

黒田家家臣期　天正13年（1585年）

当時の記録に又兵衛の具体的な足跡が現れるようになるのは、天正十四年（1586年）、九州征伐の宇留津城攻めの頃からである。領地替えを巡って徹底抗戦を行った城井氏との戦い、文禄元年（1592年）から始まる朝鮮出兵や慶長五年（1600年）の関ヶ原の戦いなどに従軍。朝鮮出兵の第二次晋州城攻防戦では装甲車を作って城壁を突き崩し、加藤清正配下の森本一久らと一番乗りを競った。関ヶ原の戦いでは石田三成家臣の槍の名手である大橋掃部を一騎討ちで破るなどの武功を挙げている。

戦後は、大隈城（益富城・福岡県嘉麻市）16,000石の所領を与えられた。その時、長政に「自分の右腕」とまで言わしめた又兵衛だが、両者の関係は次第に悪化。原因には諸説あるが、愚直なまでに猪突猛進型で、主君に対しても忌憚なく意見する又兵衛と長政とでは、根本的にソリが合わなかったともいわれる。

「秀吉の一夜城」　嘉麻市提供

黒田家出奔後　慶長11年（1606年）

如水（官兵衛の法号）の死から二年後の慶長十一年（1606年）、又兵衛は一族揃って黒田長政が後を継いだ黒田家を出奔する。当初は豊前国の細川忠興を頼ったが、元から関係がこじれていた両家（黒田家・細川家）が一触即発の状況となり、徳川家康などの仲裁により細川家を退去する。又兵衛の智勇を惜しんで全国の大名（福島正則・前田利長・池田輝政・結城秀康など）から召し出しがかかるものの一旦故郷である播磨国に戻り、領主となっていた輝政を介して岡山の池田忠継に仕えた。

しかし、長政が又兵衛への「奉公構」（他家への再仕官を禁ずる回状）という措置を取って干渉していたため、慶長十六年（1611年）より京都で浪人生活を送ることになる。

大坂夏の陣　慶長19年（1614年～1615年）

慶長十九年（1614年）、大坂の陣が勃発すると、又兵衛は豊臣秀頼の招きをうけて、真っ先に大坂城に入城する。旗頭として天満の浦での閲兵式の指揮を任された際その采配の見事さから「摩利支天の再来」と称される。徳川家康からは、又兵衛と御宿政友のみが警戒される名望家であったと称された。夏の陣のときには、家康は播磨一国を与えるという条件で又兵衛に裏切りをすすめたが、「東方がお手弱ならばともかく、朝日の出るような勢い。大坂方は十日ともつまい。この時に、心変わりするのは武士の本意にあらず」と見事に断ったと言われている。

又兵衛は歴戦の将として大坂五人衆の一人（他に長宗我部盛親・毛利勝永・真田幸村・明石全登）に数えられ、大野治長・治房らを補佐した。冬の陣では6000人の遊軍を任され、鴫野・今福方面を木村重成と協力して守備し、上杉及び佐竹勢と相対した。

翌年五月、大坂夏の陣の道明寺の戦いにおいて又兵衛は、大和路の平野部の出口・国分村での迎撃作戦の先鋒として2800の兵を率いて、六日の未明、平野郷から出陣した。しかし、徳川方先鋒大将の水野勝成が率いる部隊が、既に国分村まで進出していた。次善の策として、中間にあった小松山に布陣し、寡兵ながらも抜け駆けしてきた奥田忠次を討ち取るなど、孤軍で奮戦し賞賛された。しかし、後続の薄田兼相、明石全登、真田幸村らの軍が霧の発生により到着が遅れ、逆に伊達政宗の臣片倉重長率いる鉄砲隊など、十倍以上となった相手に対し、又兵衛は山を降りての展開・突撃を敢行し、乱戦の中に討死した。元和元年（1615年）五月六日、五十六歳であった。

又兵衛が討ち死にしたと言われる小松山（大阪府柏原市玉手山公園）にある後藤又兵衛の碑。

大坂夏の陣で激戦地となった道明寺（大阪府藤井寺市）。又兵衛の陣所が置かれた。

生存説

後藤又兵衛は定説では大坂夏の陣で討死したことになっているが、この戦役を生き延びたという伝説が各地に残っている。
・奈良県宇陀市では、隠遁生活の後に一生を終えたという伝説が残る。彼の屋敷跡と伝えられる場所には又兵衛桜（瀧桜）と呼ばれる桜の大木が残っている。
・大分県中津市の耶馬渓には、市の史跡として「後藤又兵衛の墓」が残っている。
大坂夏の陣で戦死した基次は影武者で、大坂城落城の前に豊臣秀頼を護衛し、真田幸村と共に瀬戸内海から豊後国日出に上陸して薩摩国の島津氏を頼りに落ち延びるという計画を実行していた。上陸後、秀頼一行との再会を誓い日田の地で別れた又兵衛は、かつて黒田氏が中津を領していた頃の知人である女性・お豊のいる伊福の里に向かう。お豊や里の人々と平穏な日々を過ごしていたが、やがて秀頼の病死を知った又兵衛は、豊臣家再興の夢が断たれた悲しみから、承応三年（1654年）一月二十九日、お豊の家で自刃した。又兵衛の死後しばらくしてから、村人が墓を建立したが年月を経て欠壊し、現在残っている墓は、宝暦十三年（1763年）に伊福茂助が建て替えた物である。

又兵衛桜　（奈良県宇陀市）
宇陀市提供
樹齢300年とも伝わる桜の木。2000年のNHK大河ドラマ「葵徳川三代」のオープニング映像で使用されたことで有名になった。
又兵衛は戦いに破れ大宇陀の地で僧侶になり、姓を後藤と名乗って余生を過ごしたという伝説があり、その時の後藤家屋敷跡に植えられたものとのことです。

後藤又兵衛の墓　（大分県中津市耶馬渓）
中津市提供
墓には「義刃智光居士」と書いてあります。碑文は「居士俗名を又兵衛と云う何処の人なるかを知らず。往昔この邑に寓居すること3年志気に英で武徳俊高にして眼光人を射る。憶に諸侯丈夫に逆うての謫居するものか承応3年（1654年）正月29日夜剣刃にて自殺す時往き歳久しく石碑欠落す。よってここに里人古を慕いて新に石碑を建て冥福に資するものなり」とあり、後藤又兵衛とは、はっきり書いてませんが、世は徳川時代で幕府に遠慮してのことであったと思われます。